

副 本

令和4年(ネ)第166号 自衛隊南スーダンPKO派遣差止等請求控訴事件

控 訴 人 平和子



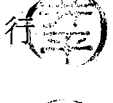
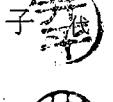

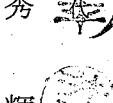
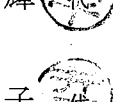


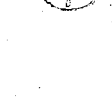
被控訴人 国

















被控訴人第1準備書面














令和5年8月18日

札幌高等裁判所第2民事部口係 御中

被控訴人指定代理人

唐	津	祐	
畑	野	雅	
井	平	英	
石	森	萌	
佐	藤	瑠	
関	口	幸	
大	前	直	
喜	多	治	
日ノ	澤	寿	
松	田	愛	

鈴	木	稜	河	
鶴	岡	俊	樹	
倉	田	智	之	
清	水	聡	史	
平	山	恵	美子	
奥	田	和	史	
井	上	靖	雄	
小	倉		淳	
林	田	泰	幸	
田	口		武	
蓮	見	真	澄	
安	藤		聖	
高	嶋	範	子	
古	橋	拓	也	
齋	藤	由	佳	
菅	原	大	義	

永	田	洋	介		
鈴	木	翔	允		
武	市	優	莉	奈	
赤	峯		慧		
大	屋	秀	樹		
下	斗	米	理		
加	藤	雄	也		
窪	田	優	希		
中	村	友	之		
鈴	木	隆	登		
石	川	峰	成		
中	村	咲	絵		
江	藤	和	範		

被控訴人は、本準備書面において、控訴人の2023年2月20日付け準備書面（控訴審第1）（以下「控訴人控訴審第1準備書面」という。）及び同年5月31日付け準備書面（控訴審第2）（以下「控訴人控訴審第2準備書面」という。）に対し、必要な範囲で反論する。

なお、略語等は、本準備書面で新たに用いるもののほかは、従前の例による。

第1 はじめに

控訴人は、控訴人が侵害されていると主張する具体的な権利ないし法的利益について、①「控訴人の生命、身体、健康及び財産という絶対権的人格権」（以下「控訴人主張権利①」という。）、②「控訴人が息子の命を失う危険性に直面させられないという人格的利益」（以下「控訴人主張権利②」という。）及び③「これを止める活動をするために息子と縁を切るという選択を控訴人が迫られないという人格的利益」（以下「控訴人主張権利③」という。）と整理し、本件においてこれらの権利ないし法的利益がいずれも侵害された旨主張する（控訴人控訴審第2準備書面1ないし3ページ）。

しかし、控訴人が整理した主張の内容を踏まえても、控訴人主張権利①ないし③は、いずれも国賠法の救済が得られる具体的な権利ないし法的利益であるとはいえず、控訴人らの主張は失当である。

以下、詳述する。

第2 控訴人主張権利①ないし③は、いずれも国賠法の救済が得られる具体的な権利ないし法的利益に当たらないこと

1 控訴人主張権利①ないし③について

控訴人は、控訴人主張権利①ないし③について、いずれも人格権又は平和的生存権によって基礎づけられる具体的な権利ないし法的利益であると主張するものと考えられる（控訴人控訴審第1準備書面6ないし8ページ、控訴人控訴

審第2準備書面3ページ)。

しかし、控訴人において、「改正PKO協力法に基づいて自衛隊をUNMISに派遣したこと」によって控訴人主張権利①ないし③がいずれも侵害されたと主張していること(控訴人控訴審第2準備書面1及び2ページ)などを踏まえると、控訴人主張権利①ないし③は、いずれも、侵害行為そのものによって控訴人に対する直接かつ具体的な影響が生じるものとはいえない場合であっても、その侵害を観念し得る広範な権利ないし法的利益として主張されているものと解するほかない。しかし、そのような広範な権利ないし法的利益の内容は抽象的なものであって、その成立要件、法律効果等が一義性に欠ける極めて曖昧なものといわざるを得ない。結局のところ、控訴人主張権利①ないし③の侵害の内容として控訴人が述べるのは、南スーダンにおける国際平和協力業務を自衛隊の部隊に行わせることについて、これに反対する控訴人の主義・主張が受け入れられず個人としての感情が害される、あるいは、自衛隊員である子が派遣されるのではないかとといった漠然とした不安感を抱き、そのような考えに基づいて自ら行動した結果の不利益という域を超えるものではないのであって、そのような内容をもって、控訴人主張権利①ないし③について、国賠法の救済が得られる具体的な権利ないし法的利益と認められる余地はない(原審答弁書第5の2(3)(44ページ)、原審被告第3準備書面第1の2(1)第3段落及び控訴審における答弁書第2の2(3)(9及び10ページ)の主張と同旨。なお、控訴人らがこれらの権利ないし法的利益の根拠と主張する平和的生存権に具体的権利性が認められないことは、原審答弁書第5の2(2)イないしオ(40ないし43ページ)及び原審被告第2準備書面第2の2(2)イ(9ないし13ページ)参照。)

2 原判決の判示が正当であること

原判決も、「原告が前記のような思わないし心情(引用者注:控訴人が、人が殺し殺される関係にあること自体が耐え難いという平和への思いから、子を

含む自衛隊員の生命侵害それ自体が控訴人自身の利益を侵害するものであると感じていること)を有しているからといって、これによって、当該自衛隊員とは別の人権享有主体である原告自身の権利が侵害されたとみることはできないといわざるを得ない。」(原判決19ページ)と正当に判示するほか、「原告を含む自衛隊員の家族が抱くこの不安等(引用者注:自衛隊員の家族として、子が海外に派遣されるおそれがあり、その場合に子が戦闘に巻き込まれると生命身体等が害される可能性があると感じて、強い不安感を抱くこと等)は、当該自衛隊員の生命身体等に危害が生じ又はその危険があることに由来して生じるものであって、不安等を感じる主体に家族が含まれるとしても、その侵害される権利ないし利益の主体は、当該自衛隊員自身というべきである。(中略)その侵害に対して家族が不安を感じたからといって、直ちに当該家族の法的に保護される利益が侵害されたとみることはできない。」、「本件において、(中略)原告の子が実際に派遣されることはなかったというのであり、原告の子の生命身体等に具体的な危険が及んでいるとも認められないから、原告の不安は、なお一般的な不安の域を出るものではないといわざるを得ない。原告がこの不安から自衛隊の海外派遣に反対する活動をしたことで、自衛隊内における子の立場への配慮との葛藤が生じる立場に置かれ、子との絶縁につながったとすることについても、それが原告の精神疾患につながっている点で軽視できるものではないが、原告にとっての平和や自衛隊の活動に対する考え方と自衛隊員として勤務することを選択した子にとってのそれとの間の意見の相違や、それを踏まえた原告及び子の行動の選択に起因する要素があることも否定できないのであって、これをもって原告自身の権利が侵害されたことを基礎付けることはできない。」、「これらのことに照らすと、原告の経歴・職業及び派遣される可能性のある自衛隊員の母であることを前提にUNMIS Sへの自衛隊の派遣が原告に精神的苦痛を与えるとする点も、原告の主張する内容が具体的権利性を有することを理由付けるものであるということとはできない。」(同21及び22

ページ) と正当に判示している。

3 小括

以上のとおり、控訴人主張権利①ないし③について、いずれも国賠法の救済が得られる具体的な権利ないし法的利益と認められる余地はない。

第3 結語

よって、原判決のうち、本件国賠請求に係る控訴人の請求を棄却した原判決は正当であり、また、本件差止めの訴えについては、不適法といわざるを得ないが、仮にこれが適法とされるとして、本件控訴は理由がないことに帰する。

したがって、本件控訴は速やかに棄却されるべきである。

以 上